

天天中文シリーズ講座：中国語でキャリアアップ！

「中国語でキャリアアップ！」は中国でキャリアを発展させる各界の方々に、仕事の現場や中国語学習法についてお話を伺う「天天中文」のシリーズ講座。中国の各界で活躍する皆さんに、仕事や生活のリアル体験をお伺いします！

第8回（2022年4月29日）ゲスト：

伊藤祥雄（いとう さちお）さん

（略歴）

1968年生まれ、兵庫県出身。大阪外国語大学外国語学部中国語学科卒業。在学中に北京師範大学中文系留学。大阪大学大学院文学研究科博士前期課程修了。「天天中文」顧問。現在、NHK国際放送局の中国語放送番組「華語視界」「東京網播間」キャスター。武蔵野大学、東洋大学など複数の大学、講座での講師を務めるほか、中国語の教材を多数執筆。2022年4月より、NHK「テレビ中国語会話」番組テキストの文法に関するコラムを執筆している。

天天中文：今日は中国語業界で著名な伊藤先生にいらしていただき、本当にありがとうございます。私と伊藤先生は、その昔、北京師範大学で留学生としてご一緒させていただいているんですね。当時の伊藤先生はまだ少年のような、可愛いらしい感じでしたが（笑）。その後、30数年、大変なご活躍で、そういえばこれまで伺ったことがなかったのですが、伊藤先生はどうして中国語に興味をもたれたのでしょうか？

伊藤：そうですね、子供時代は僕、中国にまったく興味はないし、何も知らなかったのです。高校三年までそんな状態で、中国語にも全然興味はありませんでした。中国という国がある、とか「毛沢東」という名前くらいは知っていましたが、本当にそれくらいで。それが高校三年生の夏休み、ですね。当時は英語を勉強したくて大阪外大にいきたいと思っていましたが、世界史がちょっと苦手。中国の歴史も漢字がいっぱいあってよく分からないと思っていて、それで歴史が整理できるかなと思って吉川英治の小説『三国志』を読み始めたのです。ちょっとわかったらいいな、くらいの気持ちで1冊読み始めたら、はまってしまいまして。文庫本で8巻あったのですがそのあと全部買って夏休みの間、受験勉強もせず読みふけてました。それで急に英語でなくて中国語を勉強したい！と思い始め、急遽、中国語学科に志望を変更しました。

天天中文：そうなんですね。「天天中文」の先生方を選抜する面接で「どうして日本語に興味をもったの？」と聞くとほとんどの人が「アニメが好きで日本語を勉強しました」と答えませんが伊藤先生も似てますね。

伊藤：ええ、『三国志』がものすごく好きで、『三国志』が好きというその気持ちだけで中国語を専攻したので。まわりの友達はそのなりに近現代の中国に興味を持っている人たちですし、大学の授業も現代中国を教えるものだったので、最初は知らないことだらけ、戸惑いもあって、「選択を間違ったかな」と思ったこともありました。でもそのうち中国語自体に興味が移ってきて、『三国志』はいまでも大好きなのですが、だんだん中国語そのものにはまってきて、今に続いている感じです。

天天中文：伊藤先生には「天天中文」のメルマガをご執筆いただいています。この場面でこの表現を使う、など『三国志』に関するお話も面白いですね。私などは『三国志』は6巻目くらいで挫折してしまいましたが。

伊藤：そうですね、後半はあまり面白くないかもしれません（笑）。

天天中文：でも、『三国志』は、何回も繰り返して読むと、その時々で味わいが違いますよね。それが中国古典の面白さかもしれませんね。さて、そんな伊藤先生ですが、ご活躍が目立ち始めたのが特にこの15、6年ですね。

伊藤：はい、最初の本を出したのが2004年でした。まだ若かったのでちょっと恥ずかしいのですが……。

天天中文：イメージとして伊藤先生は、中国語のなかでも特に文法に強い印象ですよね。でも、発音もものすごくきれいですよね。私は北京師範大学で一緒にいた時に「伊藤君、どうしてそんなに発音が上手いの？」と聞いたことがありましたよね。そしたら伊藤さんが「原口さん、大阪外大では先生が怖くて発音を間違えるとチョークが飛ぶんですよ。体育会のようなものですからね、発音だけは上手いんですよ」という答えでしたが。やはり、発音というのは、そのくらい執着してやらないと上手くならないのでしょうか？

伊藤：そうですね、執着というか、発音というのは流せば流れていくんですけど、「ちゃんとしよう」と思わないと上手くならないですね。中国の人たちもまあ、ある程度言っていることの意味がわかれば直してくれなくなりますし。そうするといつまで悪いところが直らないので。特に最初のうちにうるさく言われたほうがいいかもしれないですね。そして自分で研究して、それが面白くなってくるといいと思います。そうするとよくなっていくのではと思います。

天天中文：いつだったか伊藤先生と東京の新橋で飲んでいた時に、そこに中国人がいて、酔

っぱらった伊藤先生が話しかけたことがあったんですよ。伊藤先生と中国人は普通に会話していて、そこに私が入ると「日本人なのに中国語を話すのか、上手いね」と言ってくれるんですよ。つまり、相手は伊藤先生のことは完全に中国人であると思い込んでいるんですね。それで、ああ、やっぱり全然違うんだなあ、と思って私も発音を意識するようになりました。でも、いまでも話し始めた瞬間、「日本人？」と言われますので、やはり最初に発音をやっておく、というのは大事だなあ、と思います。

今、伊藤先生が教鞭をとる大学では、中国語を学ぶ学生さんは、どんな感じでしょう？増えているのでしょうか？

伊藤：近年、中国語を学ぶ学生はずっと多い状態ですね。漢字なので楽をできる、という気持ちもあるみたいで（笑）、必ずしも中国語に興味を持ってという学生ばかりではないようですが。東洋大学と武蔵野大学で教えていて、東洋大学はいわゆる第二外国語で、自分で選択してくる学生たちです。今年の1年生は全部で百人くらいですかね。4クラスに分かれて25人ずつ勉強しています。武蔵野大学のほうは、僕の教えている学部は中国語が必修なので、好きでも嫌いでもやらないといけないので学生はいっぱいいますけれども。

天天中文：どうなのでしょう、学生さんたちの中国への関心の持ち方は変化がありますか？一般的にいて、政治的には日中間は緊張が高まっている感がありますよね。けれど経済的には結びつきが深まっていますよね。そうした状況は学生さんたちに影響しているのでしょうか？

伊藤：東洋大学の学生たちにはいつも、中国の何に興味があるのか、どうして中国語を勉強しようと思ったか、書いてもらうようにしています。毎年見ているんですけど、あまり状況的には変わってなくて、将来ビジネスに役立つかもしれないから、という学生が一番多いです。あとはまわりに中国人がいる、という理由ですね。バイト先や自分の住んでいるマンションの住人に中国人の家族がいて、何を話しているのかわかるようになりたい、など。身近に中国人がいる、そういう人は増えてきている印象です。

天天中文：次に伊藤先生がなさっているNHKの番組についてお伺いします。キャスター4人のうち日本人キャスターは鎌倉千秋さんと伊藤先生のお二人ですよ。現場は大変でしょう？伊藤先生といえども原稿を読む前に発音チェックをなさっているのでしょうか？苦労話を伺えればと思います。

伊藤：そうですね、どんなニュースを出すのか、などは他のスタッフの方たちが担当していて、僕は渡された原稿を読むだけなんです。原稿はカメラのところに映るようになっていてカメラ目線で読めるようになっているのですが、僕は目があまりよくないので、大きな字

でないとても不安なんですよ。ですので、すごく大きな文字に書いて、しかもいざとなった時に読み間違えたくないの、原稿のすべてに声調記号を書いておくんです。一声、二声、三声……と全部に書いてます。「伊藤君でもそんなことするの？」とまわりのスタッフの人たちにびっくりされますが、「あれ、何声だっけ？」と思う瞬間があるかもしれないと思うと不安で。ネイティブではないからかなあ、とは思いますが。ですので原稿の下読みと準備には時間がかかるので、他の方に迷惑をかけないように急いでやっています。それが苦労話といえば苦労話ですかね（笑）。

天天中文：中国人が中国人だと思い込む、完璧な中国語の伊藤先生ですら、そんなに注意なさっているんですね。今も中国語の使い手としてトレーニング的なことも続けていらっしゃるのでしょうか？

伊藤：そうですね、トレーニングというか、自分の発音に関して気になっていることはいろいろあります。それをどうすれば直るのかなと研究しています。キャスターとしては、自分としては読んでいる時に単調な感じがするように思えて、もう少しネイティブらしいリズムを身に着けたいと思っています。それで自然なアナウンスにできたらと常に思っていて。鎌倉千秋さんとはいつも情報交換してまして、キャスターの使う机の上に共有のノートがあって、そこに情報を書き留めて交換日記みたいなことをしています。

天天中文：語彙なども中国語はどんどん新しい言葉が出ますよね。流行りの言葉の新陳代謝も激しくて、一世を風靡した言葉がアッという間に消えていったり。

伊藤：そうですね、ニュースはかっちりした言葉が多く、あまり新しい言葉は使わないようにしているので、そういう言葉が入ることは少ないですが、確かに新しい言葉も意識していないと分からなくなりますね。いろいろ仕入れるようにしようとしていますけど、抜けますよね。

天天中文：ところで伊藤先生は、長い中国語の学習歴のなかで、「もう無理だ！」と挫折を感じたことはありますか？中国語の勉強を続けていると、そういう時がありますよね？

伊藤：僕は中国語を離れてインド哲学を勉強していた時期があります。その後、また中国語に帰ってきたのですが、だいぶ忘れていて中国語で仕事などはできなかったのでもそこからまた頑張りました。その時は聞き取りですごく苦労して、伸びない感じもあり、しんどかったですね。今でも聞き取りは難関で、ネイティブでない人にとっては、発音と聞き取りはずっと悩みがつきまといえますよね。僕はそのころ、NHKの中国語ニュースを録音して書き取る、という練習を始めたのですが、それが自分にとっては良かったですね。いろいろな語彙

も増えましたし。リスニングの力もそれでだいぶ伸びたような気がしています。

天天中文：中国語は一気にいかないですからね。語学的に一度むけたような感じが来るまで時間がかかりますよね。

会員：伊藤先生の最近の著作を教えてください。

伊藤：『中国語検定対策問題集』の4級、3級、2級、白水社から出していただいています。あとは単語集などもいくつか。

会員：発音の練習法について、ほかにあれば教えてください。

伊藤：発音についてはこの教材を使った、というのは特になくて、勉強を始めたころは、ふだん使っているテキストのカセットテープを聴いて真似をしながら発音練習していました。とにかく先生がものすごく怖くて「声調を間違える、などということはありません！」と怒る方だったので（笑）。もう怖くて一生懸命練習していました。

会員：私はそんなにおびえながら練習したことはないですが（笑）。そこまで目標を高く持つ、というのは大事ですね。ありがとうございます。

会員：カセットテープを聴いて真似をして、自分ではできているつもりでも、実は全然違って、ということもよくあると思います。先生が中国語を始められたころの大阪外大では、例えばですが、真似するだけではなくて、口の形、舌の位置などについて詳しい解説の授業もあったのでしょうか？

伊藤：そういう解説はなかったですね。教科書に発音時の口の断面図があるのでそれを見ながらやっていました。でも当時の僕たちには何のことだかさっぱり分からなくてあまり役に立たなかった感じですかね。真似する場合は、自分の声を録音してみるといいですね。それでどこが違うかを比較する、その作業はどうしても必要かなと思いますね。

会員：自分の声を録音するのはやっていませんでした！ありがとうございます。

伊藤：慣れるまでは恥ずかしいですけどね。でも、それはすごく役に立つと思います。

この後、中国語や中国について、さらに交流が続きました。

文・JEIS